

明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

深見奈緒子

インド・イスラーム史跡のデータ・ベース公開顛末記

戸田 禎佑

中国絵画写真アーカイブの未来

鈴木 董

英京訪書記 トルコ語写本調査で感じたこと



明・陳洪綬「醉愁圖」(個人蔵)

芭蕉葉に坐した文人が酔っぱらって書冊にもたれる姿？

実は明末の画家、陳洪綬(1598~1652)の自画像である。「変形主義」の画家陳洪綬は、当時の人物画のジャンルを代表する存在であった。本図では、彼特有のデフォルメされた形態感覚が自己表象にまで浸透し、自己と他者の境界まで曖昧にしている。

英京訪書記 トルコ語写本調査で感じたこと

鈴木 董

1. 英字での写本探索へ

1997年、長期の文部省在外研修員の選に入ることを得て、10ヶ月の予定で海外に旅立つこととなった。小生の専門はオスマン帝国史で、かつてのオスマン帝国の帝都イスタンブルに3年留学したが、今回は君府滞在は後半の5ヶ月とすることとし、前半の5ヶ月は、これまでは何回か短期で訪れたのみの英京ロンドンに滞在することとした。英京では、オスマン史関係のトルコ語写本群につき調査したいと考えていた。

ロンドンでは、SOASと略称されることので多いロンドン大学アジア・アフリカ研究学院に拠りつつ、文献調査にとりかかったが、この図書館には写本は少なく、刊本中心であり、刊本につきひとわり調べながら、写本探訪のプランをたてることとした。その際、本邦では一ヶ所で照合しつつまとめて検することが容易でないイスラム関係の写本目録、書誌が、SOASの参考書室ではよくそろっており、誠に便利であった。

2. 写本探索のこよなき手引き

写本探索計画をたてるにあたり、最も有益な手引きは、『全世界イスラム写本調査』なる英文全4巻の大冊であった。この書は、サウディ・アラビアの石油相として知られたヤマニー氏の設立したアル・フルカーイー財団の編纂にかけ、国別にその各都市にあるイスラム写本を所蔵する機関とその写本コレクションを採り上げ、その特色と言語別の所蔵数、利用方法を略述し、さらに写本目録をはじめ各々についての関係参考文献を網羅的に掲げたもので、この方面では最も完備した手引き書となっている。この書に感心していたので、滞英中にウインブルドンにあるこの財団の研究所を訪ねたが、ここにはよくまとまった小図書館があり、手引きに掲げられた参考文献が、書物と同じく国別に整然と体系的に並べられているのを見て、感銘を受けた。

3. 英国におけるトルコ語写本の分布

さて、この手引きを中心に、さらにI・R・ネットン氏の編になる『連合王国及びアイルランドの諸図書館における中東資料』等

も加えて検討したところでは、在英トルコ語写本は、約4,000点と推定される。うち、約半数が大英図書館東洋部に属し、残る半分のうち過半近くが、オックスフォードとケンブリッジの両大学に所蔵されているようである。このような写本分布は、アラビア語・ペルシア語の写本の場合にもかなりあてはまり、英国における前近代イスラム圏研究資料たる写本の三大機関への集中を如実に示している。そして、これら三機関の東洋写本コレクション形成史を遡れば、長年にわたる絶えまない努力の結果であることが知られるのである。やはり、蔵書についても、「ローマは一日にして成らず」なのであり、研究の真の発展を支えるには、長期的視野にたった体系的集書こそ重要であることを痛感した。

4. 大英図書館東洋部にて

SOAS図書館でのトルコ文と欧文の刊本コレクションの検索はひと月を経ずに終えたので、いよいよ大英図書館東洋部で探書を試みることとした。結局ここに3ヶ月以上通うこととなったが、ちょうどテムズ川南岸のブラック・フライヤーからキングス・クロスの新築の建物に移る直前の頃で、図書館の大引越しにでくわさず済んだのは幸運だった。

ブラック・フライヤーの大英図書館東洋部には、東洋部コレクションに加えインド省図書館のコレクションも収蔵されており、刊本・写本ともに、言語的多様性においても質と量においても、英国最大の東洋関係資料を擁する図書館といえる。

折角の機会なので、写本調べに先立ち、トルコ語刊本の目録通検を思っていた。結局2、3週間かかってしまったが、なかなか興味深かった。イスタンブルの大コレクション類を見慣れるといささか小ぶりにみえるが、それでも、現代トルコ語、アラビア文字綴りのオスマン語を中心に若干の他のトルコ系諸語の刊本も含めて15,000冊内外かと思われ、英国のみならず欧米でも屈指の大コレクションであると思われた。カード目録を繰るなかで感心したのは、個々の書物の内容について簡潔な紹介が附されていることであった。それは、司書の専門知識の水準を如実に示している。

刊本目録で少々道草を食った後、いよいよ

写本探索にとりかかったが、このトルコ語写本の目録としては、刊行されているのは1888年刊のRieuの編んだ目録があるのみで、新収写本については、閲覧室に仮リストがあるのみである。これらをもとに探索を始めたが、東洋部ペルシア語・トルコ語部門主任のムハンマド・イーサ・ウェイレー博士が、親切にも、現在編纂中のトルコ語歴史写本リストのコピーを恵贈されたので、大いに助かった。このリストについては、調査終了時に、詳しいコメントを残し返礼とした。

こうして、大英図書館東洋部で、オスマン史関係トルコ語写本の探索を始め、少しでも関係のありそうなものは片端から写本の現物を検していくこととなり、久しぶりに長期にわたる写本調査の醍醐味を満喫することを得た。その際、誠に役にたち、うらやましくも感じたのは、閲覧室の一画の書架群にずらりと並んだイスラム文献・写本関係の工具書・書誌・目録等の参考図書コレクションであった。一ヶ所に居ながらにして、たいいていの参考図書を手にすることが出来、それらを自由にクロス・レファレンスし得るのであるから便利なことこの上もなかった。このような利便は、かつて四半世紀も前にイスタンブルのスレイマニエ図書館の閲覧室で過した日々以来、帰国後は残念ながら味わうことが出来なかった。本邦でも、トルコ研究といわず、アジア研究全般について、高度の参考図書の完備した閲覧室が、アジア研究の一層の発展のために必須であると痛感した。東京大学東洋文化研究所の東洋学研究情報センターも、その重要任務の一つとして、かような参考図書を体系的に収集し利用に供することを真剣に考えるべきであると思われる。

大英図書館東洋部のコレクションは、イスタンブルのスレイマニエ図書館の蔵書などに比すれば、スレイマニエ図書館の超大型の個人文庫ほどの規模ともいえるが、それでも多くの興味深い写本に接し、探書を終えることを得た。

そうこうするうちに9月に入り、英国らしく気候もめっきり秋らしくなってきたところで、トルコ語写本につき全英第2位の蔵書を得るオックスフォード大学のボドレイ図書館東洋部を訪れることとした。このトルコ語

写本については、Etheの編になる1930年刊の写本目録のトルコ語写本部分でそれまでの収蔵写本については一応記述されているが、新収写本も含めたトルコ語写本総目録が、トルコ国立ボアジチ大学のギユネイ・クト教授により準備されつつあり近刊予定だと聞いていたので大いに期待していたが、遂に滞英中には出なかった。そこで、Etheの目録後の新収書については、カード目録をみることとなった。

ここでも写本調査に入る前に、トルコ語刊本の所蔵状況も見ておきたいと思ったが、言語別の目録がないので断念した。しかし、聞いたところでは、オスマン語と現代トルコ語をあわせ約20,000冊近い蔵書があるであろうとのことなので、大英図書館と匹敵するか、あるいはそれを少し上回る蔵書を擁するようである。

ボドレイ図書館東洋部での写本調査は、日限も迫りいささか急ぎ足となったが、蔵書数も500点前後とそう大きくないので、史籍関係はほぼ通検することを得、いくつか貴重な史料を見出すことを得た。これに加えて強く印象に残ったのは、蔵書もさることながら、この閲覧室が雰囲気といい、参考図書その方といい、素晴らしいということであった。そもそも、ブラック・フライヤーにあった頃の大英図書館東洋部の閲覧室は美的にはいささか殺風景であった。これに対し、ボドレイ図書館東洋部の閲覧室は、歴史の古さを感じさせる荘重で重厚な作りで非常に落ち着いた気分になれる。これに加えて、室のくの字につながった2つの壁面には、床から天井までぎっしりと、東洋学の様々の分野にわたる膨大な数の工具書・書誌・目録等が整然と並べられ閲覧に供されていた。蔵書が図書館の体、サービスが動作とすれば、閲覧室は図書館の顔ともいべきものであるから、我が東洋文化研究所でも、この方面の格段の充実が切に望まれる。そして、その責の大きな部分を、東洋学研究情報センターに期待したのである。

さて、オックスフォードにまで足をのぼしているうちに、いよいよ10月も近づき、冬の早い英国では、秋とはいえ気候も大分寒くなってきた。滞英期間も残り僅かとなったが、

英国中で蔵書数から第三のトルコ語写本コレクションを擁するケンブリッジ大学図書館も是非とも訪れておきたいと思い、オックスフォードよりさらに短期間であったが、ここにも足を運んだ。ケンブリッジ大学図書館の特徴は、ボドレイ図書館のように専門分野別に分かれた閲覧室がないかわりに、写本と貴重書を除くと全開架となっていることである。そこで、また写本調べに先立ち、トルコ語刊本の蔵書を拝見したが、アラビア語・ペルシア語刊本に比すと遥かに少数でイスタンブル滞在中に手にしえなかったような文献は、余り目につかなかった。

そこで写本調べにとりかかったが、このトルコ語写本については、ペルシア文学史の碩学E. G. Browne教授の手になるイスラム写本についての正統のハンド・リスト中に記述があるのみで、その後の新収写本については、I. Beller - Hann氏の編になる未刊のケンブリッジ大学の全機関所蔵のトルコ語写本総合リ

ストがある。この作業を引きついでいられる方の御好意でリストを拝見させて頂いた。このトルコ語写本コレクションは、オックスフォードよりさらに少し少ないが、いくつか興味深い史料を見出しえた。ここでは、トルコ語写本も、写本閲覧室で見ることとなっており、従ってその参考図書は写本全般にわたるもので大英図書館やボドレイ図書館東洋部ほど専門的かつ体系的ではないが、それでも重要参考書目のかなりは利用でき、大いに恩恵をこうむった。

在英中の訪書行を通じ痛感したのは、我が国、否、より特定して我が東洋文化研究所においても、アジアのいかなる言語・文化圏についても上述の英国の三図書館に比しても遜色ない工具書・書誌・目録の体系的収集と閲覧への提供を可能とせねばならぬということであった。そして、その任の実現を、東洋学研究情報センターに期待したい。

(東洋文化研究所教授)

中国絵画写真アーカイブの未来

戸田 禎佑

東洋文化研究所の中国絵画写真資料の意義などについて、一文書いて欲しいと頼まれた。37歳で入所し58歳で文学部に移るまでの20余年間、教官研究費の殆んどを、この資料集成に注ぎ込んできたのだから、もちろん意義がないと思ってした仕事ではない。実際、紀要の原稿用に私用の写真数十枚を焼き付けて貰った他は、ネガ、焼き付けの全てを研究所のファイルのなかに残してきた。「資料」に深い思い入れがあるのは当然だろう。しかし、この仕事に熱中していた頃、その意義について十分に輪郭づけが出来ていたわけではなかったのも事実である。そして今、時間の経過とともに、過去の仕事の意味が、自分なりに明確になりつつある。

「資料」の収集は、上野の文化財研究所の頃から始めていた。十分な予算もなく、フィルムの使いすぎを同僚に遠慮しながら、主にプ

ライベート・コレクターの収蔵品の写真撮影に熱中していたのである。それらの写真は『中国絵画総合図録』・正編中に、文化財研究所原版の一部として収録されている。カラー・スライドはあまり撮影できなかった。予算がなかったのである。これらの写真のオリジナルな原版は文化財研究所に今もあり、東洋文化研究所の原版はそのデューブである。私が上野から本郷へ移籍する時の、いわば嫁入り道具だったわけだ。皮肉なことに中国絵画なら何でも撮りたいという希望は予算に阻まれ、その為の取捨選択が、これらの資料に質の高さを与えているのだが、予算さえ許すならば、目にする全ての中国画を写真化しておきたいと云うのが、当時の私の希望であった。古美術の世界に偽物はつきものである。ことに中国画にはそれが際立って多い。だから、中途半端な鑑識をするよりも、少なくと

も絵画作品である、それら全てを記録して置くべきで、何時か必ず役に立つし、鑑識そのものにとっても、不可欠の材料となりうると考えていたのである。問題は予算、時間、手間であった。

本郷に移ってから資料収集の為の予算は、上野時代に較べてはるかに潤沢になった。さらに加えて文部省科学研究費、各種の研究助成金等により、資料収集の範囲は海外にまで広がり、その結実として、『日本所在中国絵画目録』・『海外所在中国絵画目録』及び『中国絵画総合図録』正・続の刊行が行われたのである。

ところで何事にも批判はつきもの、上記の刊行物の内容について、玉石混交であるとか、さらにありていに云えば、偽物が多く掲載されている等の評価がなされていると聞く。目録や図録に載ることを権威付けて考える人や、それに反発する人達の間には複雑な感情もあろう。これらの非難に対して、私なりの回答をしておきたい。それは美術史の方法と深く係わる問題だからである。先に真贋の別なく作品は作品であると述べた。今、たとえば、唐の王維の絵画について研究しようとするならば、現在、残されている絵画資料は悉く摸本或いは贋物の類である。つまり、今日の偽物は、明日の貴重な様式資料になるのである。贋物は、その制作期に於ける原作解釈の証しとも云えよう。従って、コレクターへの配慮の為に玉石混交になったとか、鑑識の為の時間が十分にとれなかったという類の言い訳を私はするつもりはない。むしろ、私見抜きに資料は網羅的であったほうがいいのである。資料の収集は研究活動の一部であって最終目的でないのは当然であるから、なるべく多くの人の目に、多くの作品が触れる方がいい。作品が複数の眼で見つめられることにより、共通の認識は質的に向上する。少なくとも、美術史ではそうあるべきなのであるが、残念なことに、凡庸で中途半端な資料提供が、労作として高い評価を得易いのは、何処にでもある現象である。

私自身の美術史にとって、上記の資料収集がどのような効果をもたらしたかと云うことに、ここでコメントして置きたい。二度に亘る海外調査、日本国内の調査で、強記とは云

われないまでも、中国絵画に関して私は博覧の一人になったことは確かだし、その経験が鑑識について一応の自信をもたらしてはくれた。膨大な数の作品を実見することで、記憶に留まるものと忘却してよいものが、一種の本能によって振り分けられることを知ったことは貴重である。これこそが汗して現場から情報を提供した者の特典であろう。必ずしも名作、傑作とは限らないが、美術史的に興味深く記憶に残る作品と、索引やファイルから引き出されるまで忘れ果ててしまっていた多くの作品との落差が、私の美術史の発想に極めて有益だったことは確かで、作品の魅力を言葉に置き換えるという困難な作業に際して、この落差は非常に役にたった。

もともと資料収集は、一種の力技であって時間と金の産物、才能など必要としないと言える側面をもつ。その力技の段階での“努力賞”が多すぎるのが現実ではあるのだが。美術史的な能力は、資料集めの力技とは関係のないところにあると思う。資料が公にされ、研究素材を整えることがより楽になれば、造形の秘密についての思索に、もっと時間を割くことが可能になり、そこから、思弁的な美術史も生まれようと云うものである。オリジナルとは何か、バージョンとは、コピーとは何か、そして造形とは何か、といった問題の究明、或いは様式の誕生、生成、崩壊、再生の記述が、多くの作品をベースに、実証的に行われることが、美術史の主流となっていくことが予想される。

余談になるが、資料探訪の旅の経験は、私に、従来の日本の文化財指定行政について具体的な疑念を抱かせるようにもなった。作品名をあげることは控えるが、中国絵画の分野について云うと、国宝、或いは重要文化財の指定物件に、国際的な視野で見て、おかしな物が数点ある。指定は絶対評価ではない筈で、その時点での研究成果を反映させているものにすぎないから、50年、或いは100年ごとに再検討した方が良く今は思う。もう諦めてしまったが、文化財専門審議会委員のままでは、指定そのものは行政的行為であるのだが、それでも学術上の誤りは素直に認めた方が国際的な恥をかかずにすむ。ただ、現状で

は、日本で外国(中国)の美術品を指定するという特殊事情と、財産権としての既得権益を失うことへの公私の所有者側の抵抗とが絡んで、容易ではないことが当然、予想されるのであるが。行政と学術の関係は何時でも何処でもややこしい。

写真資料を公開して、研究のために共通の広場を作ろうとした東洋文化研究所の大企画は、今、大量情報処理の時代にあつて、今後の美術史研究のあり方そのものを、大きく変えようとしている。

最近、仕方なしにマウスを握るようになって、家の猫達から鬮をを買っているが、素人なりに、コンピューターの潜在能力の大きさに恐怖すら感じるほどである。もし電子カメラ等の採用によって、写真資料が自在に全世界を駆け巡るようになれば、美術史の研究者の視覚的経験は現在とは比較にならない程に増大し、ただ見ている、知っているタイプの専門家を脅かすことになるだろう。美術館やコレクターが所蔵品の画像を一般に発信すれば、若い研究者は、自分の専攻する分野の位置づけを幅広い視野のなかで出来るようになる。このような大きな視野と教養は、従来の日本の研究者の多くに最も欠けていたものである。それでは情報化の進んだ未来に、東洋文化研究所の写真資料は、どのような役割を果たすのであろうか。

現在、中国の古典絵画の写真資料では、世界で最も完備しているとはいえ、まだまだ不十分な面が多いそれは、今後さらに充実させていかななくてはならない。しかし、その調査・資料収集の方法の主流は従来と異なったものとなるだろう。『中国絵画総合図録』・正編及び続編の為にとられた方法は、一部そのまま残りはするだろうが、基本的には新しい情報処理のやり方にとって変わる筈である。例えば、資料収集の初期段階にあつてはカラー・スライドの撮影は困難を極めた。フィルムが高価だったうえに、オート・ストロボの性能が悪く、短時間内の撮影には向かなかったこと等が原因である。しかし、現在の技術をもってすれば、このような問題は簡単にクリアーでき、さらにビデオ・カメラの採用等によって格段に鮮明な画像を得ることもできるだろう。昔時に較べれば、予算的に

もはるかに楽なはずだ。電波に乗って鮮明な画像が世界中を飛び交うようになったら、わざわざ現地まで出向く必要もなくなろう。時間も費用も節約できる。しかし、20余万件を超える東洋文化研究所の写真資料はその価値を失うことはないだろう。何故なら、重力は質量に比例するように、国内外の画像資料は、東洋文化研究所のセンターの重力に吸引されるであろうから。所蔵者が、作品にカメラを向けるだけで画像がセンターに送られ、センター側は、それを整理して登録するという時代は、すぐそこまで来ているのではないだろうか。ただし、そのようになる為には当

方の発信への努力が不可欠である。吸引された資料が、再び発信されるという保証があってこそ、すなわち研究の為の情報交換がフェアに行われるセンターであると世界に認定されてこそ、資料が自然に集積される状態となると予想されるからである。もし、そこに資料の独占、そのことによる研究体制の優位をはかるような、つまり、戦略的・侵略的な意図があれば、挫折せざるをえないだろう。センターの資料収集と提供の活動は一種のボランティアともいえる。

センターが有効に機能すれば、資料を抱えるだけで優越感に浸り、考えることをしない

古い世代にとっては痛撃となる筈だ。美術史のみならず、学界の全ての分野が情報処理の革命期に有るのが現時点と云えるが、視覚の対象としての物を扱うと云う意味で、その画像処理を中心とするセンターの作業は、より先鋭的であるべきだろう。おそらく、単純な物知り図像学は影をひそめ、研究の中心は創造の秘密に直接、果敢に向き合うことになる。大量の情報を武器に最も先鋭な感性が、論理性をもって造形の本質に迫ることが出来るなら、なんと素晴らしいことだろう。これは私の夢であり希望でもある。

(本学名誉教授・元センター主任)

インド・イスラーム史跡のデータ・ベース公開顛末記

深見奈緒子

1. はじめに

グジャラート地震の記憶も新しい2001年春、1年半ほどの準備期間を経て、インド・イスラーム史跡のホーム・ページを研究所内向けに実験的に公開する運びとなった。(図1)地震の後、まだ現地に赴くことはできないが、いくつかの歴史的遺構はひどい損傷を被り、中には崩壊してしまったものもあると伝え聞く。地震という突然の災害に向かい合うと、過去の遺産を未来へと伝えるために、そして歴史的な建築文化を研究するためにも、建築物を記述することが重要であることを改めて実感する。建築を完全に写し取ることは難しいが、写真はそのためひとつの有効な媒体であろう。加えて古い写真は、今はなき建物の姿を知る重要な史料となる。古い建造物は、自然災害によって姿を消すこと以上に、人為的都市開発に弱いことは、デリーの現状と40年前を比較すれば、手に取るように明らかである。

東洋文化研究所は、40年前に東京大学インド史跡調査団によって撮影された膨大な写真資料を保管している。この貴重な資料を

く世界に公開することは、単にインドの建築文化を紹介するに留まらず、いかに人類の文化遺産を後世に伝えていくべきかという大きな問題に対する一つの答えを提示することにもなるであろう。この公開計画に関して、調査団を組織された諸先生方は好意的に捉え、協力してくださった。今は亡き山本達郎先生は、緑に包まれたご自宅で、ホーム・ページの画面を見ながら微笑まれた。荒松雄先生は近著の建物紹介の文章をホーム・ページに掲載することを快諾してくださった。月輪時房先生は写真資料整理のために、終日研究室を貸してくださった。改めて御礼を申し上げたい。

2. 公開の指針

準備に当たった最初の問題は、どのように公開していけばよいのかという指針の決定であった。写真には風物や人物など、様々な種類が含まれていた。問題意識を鮮明にするために、そして私の専門分野であることから、インド・イスラーム建築という調査団の主目的に限定することを決めた。それゆえ、ヒन्दゥー遺跡や当時の風物などは今のところ公開の対象に含んでいない。

しかし、インド・イスラーム建築とは、一般には馴染みのない分野である。とはいえ、公開するからには多くの人の興味をひくことが望まれる。加えて、第一線の研究者にとっても有用なサイトでなければならない。この両極の要求を満たすために、資料の公開を紹介用のホーム・ページと、検索可能なデータ・ベースにわけて考えていくことにした。

写真整理の仕事は、まずどんな写真がどのくらいあるのかということからはじまった。フィルムは数点の欠落はあるものの、プリキの缶に大事に保存されていた。イスラーム建築だけ取り出してもフィルムのコマ数は約2万点にのぼる。これらのフィルムに何処の何という建物が撮影されているのかを、見極める仕事は避けて通れない。ベタ焼き帳を照合しながら建築の所在地と名称はどうか結びつき、エクセルに打ち込んだ。一方、公開のためには写真資料のデジタル化が必要で、まず4×5サイズの白黒ネガフィルム約3000点をフォトCDに保存する仕事を発注した。

3. ホーム・ページ

ホーム・ページの作成はリサーチ・アシス

タントの鶴田さんと東洋史修士課程在学中の原さんが担当した。写真にはデリーの建築と地方の建築があり、デジタル化した写真のうち約700点が地方の建築である。まず点数の少ない地方の建築からホーム・ページを作成していくことにした。(図2)

ホーム・ページ的设计に関しては、都市、建物、写真種類とリンクをはることによってデジタル化した資料の全容を見ることができるようを目指した。都市説明と都市図(図3)を入れることによって、建築単体ではなく立地や近傍の建築との比較を可能とする。また建築においては、平面図を挿入することによって、個々の写真を一枚一枚繰っていくのではなく、複数の写真をヴィジュアルに結び付けて空間を仮想できるようにする工夫を行った。(図4)特に枚数の多い物件では、写されているものの種類や方向によって写真をならべたので、相互比較によって一枚一枚の写真から得られる情報以上のものが引き出せると確信する。無論、一枚一枚の写真を拡大する機能も付随させた。(図5)

さらに、都市毎に機能別に整理した分布表(図6)から建物の機能をクリックすることによって当該建築の顔写真が一覧できるページも作成した。(図7)一枚の写真で建物を代表させるという考え方は検索プログラムを考える際の大きなヒントとなった。手前味噌かもしれないが、いくつかの工夫によって、画像としてはそれなりに見ごたえのあるページとなったと言えるのではないだろうか。近期中に英文ページも公開予定で、現在翻訳を依頼中である。

4. 検索ページの作成

しかしながら、データ・ベース公開といいながら、基礎となるデータとヴィジュアルな写真を結び付けるという仕事は残されたままであった。また、上に述べたようなホーム・ページ作りは作成にかなりの時間がかかる。約2300枚のデリーの写真をホーム・ページに掲載する仕事は、到底2000年度では仕上げそうもない。そこで、現在工事中であるデリーのページに関しては、検索による画像の提示という手段をとることにした。とはいえ、プログラムを書くことなど到底私の手におえ

る仕事ではなく、助手の山本さんの御世話になっている。

ただし基盤となるデータを作成し、何を検索するのは提案せねばならない。これは人生、初めての課題で、個々の写真を見れば見るほど難しくなっていた。常々顔なじみとなった写真たちではあるが、不特定多数の人々は何を求めてこの資料を見るのだろうか。どの写真にもほとんどアーチや柱、ドームといった共通する建築部位が写っている。こんなことでは、いわゆる建築部位をキーワードとして入れれば2300点のうち2000点くらいはヒットしてしまう。そうかといって数十点を限定するような指標を求めれば様式研究に陥ってしまう。

そんな時、写真はある建築を写したものであるということに再認識した。まず、個々の建築のデータ・ベース作成へとたち戻るべきであ

り、その後に、建築と写真を結び付ける作業をすればよいのだと判断した。建築から各写真への段階においていくために、第一にその建物の部分名、第二に写真種類、第三に撮影方向を書き加えたデータを作成した。

検索のキーは、今のところ年代、所在地、機能、部位、写真種類、撮影方向を予定している。建築名称を入れれば該当写真を一覧することができるけれど、インド史跡調査団の報告書『デリー』第1巻遺構総目録を見れば明らかなように、名前のない建築も多数収録されている。知名度の高い建築はごくわずかで、名称はむしろ物件認定のための指標の一つにすぎないといえる。

所在地に関しては『デリー』の付図にある2キロメートル四方の柵目番号と対応している。本来ならば複合建築を設定していかなければならないが、複合建築の定義が難しいので現



図1

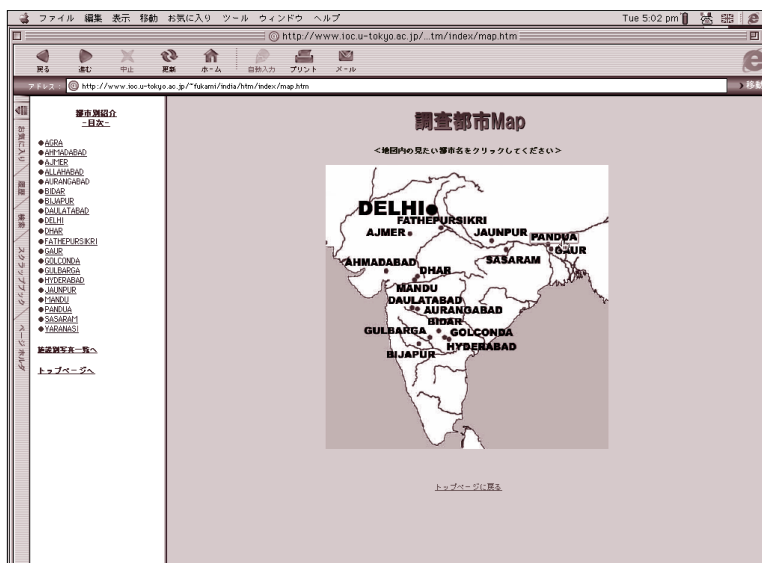


図2



図3



図4



図5

状ではまだその機能は付随させていない。ただし、近傍の建物を迎えることは可能である。年代に関しては、第一に年代が明確なものと、推定によるものを大きく二分した。推定の場合は「デリー」の記述に従いムガル朝とそれ以前を3期に区分したものを表記した。機能はモスク、墓地、墓建築、水利施設、その他というデリーの区分を踏襲しながらより細かい区分を行った。これらは、絞込検索に対応する指標と考えている。しかし、これらの検索は、建物のデータとして絞り込んでいるわけであるから、絞り込みの結果として、それぞれの物件に属する様々な種類の多くの写真が出てくるよりも物件を代表する顔写真が出てくる方が良いと判断した。無論その物件に属する全部の写真へと迎えることを捨て去ったわけではない。

部位に関しては、たとえばモスクならば、



図6



図7



図7

中庭、礼拝室、ミフラーブ、廻廊、門のように機能毎に細分類を行った。この場合も、Aモスクの中庭写真と検索すれば、Aモスクの写真のうち中庭を撮影した写真n枚すべてが出てくるが、第2期のモスクの中庭写真とひいた場合には、該当物件m件の代表的中庭写真が1枚ずつ出てきて、m件を比較可能とする方が望ましいと考えた。写真種類、撮影方向についても同一な処理を行った。

以上まとめると、建築写真はあくまでもある建築に帰属するものであると考え、それをあらゆる指標として名称、所在地、建立年代、機能をとらえ、建築の写真同志を比較する際に必要なキー・ワードとして、部位、写真種類、撮影方向を設定したのである。

作成した建築データ・ベースにはより細かい情報も書き込んである。たとえばそのモスクが興行何間で間口何間なのかというような

情報は、個々の写真とはなかなか合致しないので、今のところ保留にしている。写真とは別に建物データ・ベースとしてリンクさせていこうと考えている。

5. おわりに

貴重な資料の公開という仕事を手伝わさせていただいて、自分自身、インド・イスラーム建築に対する知識を増やすことができたばかりではなく、建築写真という情報をどのように考えねばならないかという点を学ぶことができた。今回公開できるのはインド史跡調査団がインド・イスラーム建築を撮影した約2万コマのフィルムうち3000点だけではあるが、残りの写真についてもある程度の見通しはついたように思う。

今後の仕事としては、残された写真をデジタル化し、公開していくという基本的な作業に加え、いくつかの発展の可能性が考えられよう。今回のデータ化で未整備な点、たとえば複合建築の設定や建物の詳細データの付加などを写真と結び付けることなどを解決せねばならない。

加えて、デリー調査団の写真以外にも貴重な調査写真ながら未発表の写真資料が研究者の間にはたくさん眠っている。これらを積極的に収集し、より大きなデータ・ベース、ひいてはイスラーム建築史の網羅的建築基礎資料の集成を構築していくことは、大きなプロジェクトとなるであろう。いくつかの書物には建物のカタログやリストは付随しているが、たとえばインド一国をとっても、歴史的建造物を網羅的にしかも個別に文字とビジュアルなデータを一括してみられる書物はない。特にイスラーム建築はいくつもの国をまたぎ、歴史的にもかなりの広がりがある。このような膨大な蓄積を必要とする仕事は研究者個人で完遂することは難しい。インド・イスラーム史跡のデータ・ベース化を機に、東洋学研究情報センターを基地として壮大なプロジェクトが開始されることが望まれる。このようなデータ・ベースは、単にイスラーム建築史研究者の座右の書となるばかりではなく、新たな視点から学際的研究が始まることのできかけとなるのではないだろうか。

(センター客員教授)

センター便り

プロジェクトの進捗状況

センターではさまざまなデータベースの作成を進めている。その内容を簡単に紹介し、2000年度末時点における進捗状況を報告する。ホームページで公開されているものに*印をつけた。

東アジア族譜データベース（担当：宮脇博史）

族譜、つまり東アジアで作成された一族に関する記録を収集し、データベース化する。東洋文化研究所所蔵の朝鮮・中国族譜の目録作成とデータベース化を行なった。また韓国の族譜2点の全内容を入力した。

近代朝鮮関係日本語図書データベース（担当：宮脇博史）*

1868-1945年に出版された朝鮮関係日本語図書約17,000冊の日本国内所在データベース。既に完成してホームページ上で公開されている。

中国絵画デジタル・アーカイブ（担当：板倉聖哲）

東洋文化研究所が長年にわたって収集してきた中国絵画の焼付写真20万点のデータベースを作成する。準備作業として書誌データの整理を進めており、研究所が刊行した『中国絵画総合図録』正編部分を終了した。引き続き続編部分の整理を行っている。また写真のデジタル化を進めている。

インド・イスラム史跡資料データベース（担当：深見奈緒子・中里成章）

東京大学インド史跡調査団が撮影したイスラム建築の写真画像データベース化する。約3000点のデジタル化を完了し、ホームページを作成し所内公開した。このホームページの英語版を作成する作業を進めている。またデリーの遺跡の写真の検索システムを作成中である。

倉石文庫漢籍のデータベース作成（担当：尾崎文昭）

倉石武二郎教授旧蔵の漢籍約4,300部を整理しデータベース化する。経部・史部・子部の入力を完了した。分量でおよそ半数をしめる集部については、データシートの作成を終えた段階である。

現代中国書データベース（担当：岡本サエ）*

東洋文化研究所が1994年までに受け入れた現代中国書をデータベース化する。プロジェクトは2000年度で完了し、46,018点からなるデータベースをCD-ROMに収録し、国立情報学研究所総合目録データベースに提供した。

東京大学東洋文化研究所漢籍目録データベース（担当：丘山新）*

『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』の内容をデータベース化する。『目録』に収録された漢籍約5万件の入力をすべて終えた。

東洋文化研究所所蔵中国雑誌目録データベース化プロジェクト（担当：尾崎文昭）

東洋文化研究所が所蔵する中国雑誌の目録をデータベース化する。初年度にあたり、データ入力方式の設定等の準備作業を行い、600件のデータを入力した。

内蒙古出土学術資料のデータベース化（担当：後藤明）

江上波夫教授が収集した資料を整理し、データベース化する。出土資料1911点の整理・登録を終えた。引き続きデジタルカメラによる撮影と法量の計測を進めている。234点についてこの作業を終え、コンピュータによるデータの検索ができるかたちにした。

「Tibetan-Sanskrit 構文対照電子辞書構築の基礎データ収集と整理」*（担当：鈴木隆康）

以上の他にも東洋文化研究所では、センターとの連携の下に、次のようなデータベース・プロジェクトが進行中である。

「戦後日本政治・外交データベース」*（担当：田中明彦）、「データベース20世紀年表」*（同）、「アジア・太平洋諸国の対外政策」*（同）、「人文研・東文研漢籍目録人名索引データベース」*（担当：岡本サエ）、「中国近現代文学関係雑誌記事データベース」*（担当：尾崎文昭）、「ヒンドゥー儀礼基礎資料作製データベース」*（担当：永ノ尾信悟）、「ミティラー地方低カーストの儀礼の歌のデータベース」*（同）、「国内所蔵南アジア関係写本のデジタル化に向けて」*（同）、「西アジア・データベース形成のための基礎研究」*（担当：鈴木董）、「歴史都市イスファハーンに関する総合的データベース」*（担当：羽田正）、「17世紀ヨーロッパ人によるペルシャ旅行記のテキスト・データベース」*（同）。

東洋学研究情報センター運営委員会委員 (2000年度)

所外委員

落合 卓四郎 附属図書館長、大学院数理学
研究科・理学部教授

Ch en, Paul Heng-Chao

大学院法学政治学研究所・
法学部教授

河原 秀城

大学院人文社会系研究科・
文学部教授

泉田 洋一

大学院農学生命科学研究科・
農学部教授

中兼 和津次

大学院経済学研究科・
経済学部教授

黒住 眞

大学院総合文化研究科・
教養学部教授

田嶋 俊雄

社会科学研究所教授

小林 宏一

社会情報研究所教授

鶴田 啓

史料編さん所助教授

所内委員

岡本 サエ

教授 汎アジア部門

松井 健

教授 汎アジア部門

平勢 隆郎

教授 東アジア研究部門(第一)

甘 懐真

教授 東アジア研究部門(第一)

小川 裕充

教授 東アジア研究部門(第二)

永ノ尾信悟

教授 南アジア研究部門

委員長

鎌田 繁

教授 西アジア研究部門

中里 成章

教授 センター造形分野

宮脇 博史

教授 センター文献分野

板倉 聖哲

助教授 センター造形分野

センター長

原 洋之介

教授、研究所長

センターのスタッフ

原 洋之介

(はら ようのすけ) センター長・
東洋文化研究所長。東南アジア経済。

中里 成章

(なかざと なりあき) センター主
任・造形資料学分野教授。南アジア近現代史。

宮脇 博史

(みやじま ひろし) 比較文献資料
学分野教授。朝鮮近代史。

板倉 聖哲

(いたくら まさあき) 造形資料学
分野助教授。東洋絵画史。

鈴木 隆康

(すずき たかやす) 比較文献資料
学分野助手。仏教学。

深見奈緒子

(ふかみ なおこ) 客員教授。イス
ラム建築史。

佐々木郁子

(ささき いくこ) 業務掛長。

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第5号

発行日 2001年3月31日

編集・発行 東京大学東洋文化研究所

附属東洋学研究情報センター

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1
号

電話 03-5841-5839(直通)

FAX 03-5841-5898